

# 『カーランダ・ヴェーハ・スートラ』における 六字真言と准胝陀羅尼

佐 久 間 留 理 子

## 1. はじめに

インドにおける観自在信仰を説く代表的な経典の一つに『カーランダ・ヴェーハ・スートラ』(*Kāraṇḍavyūha-sūtra*, KV) がある。KV の梵文には現在のところ次の三種のヴァージョン (ver.) が知られる。第一に、紀元 7 世紀初頃までに書写されたと推定されている二本のギルギット写本 (G1, G2) を使用したメッテ校訂本がある。これらの写本の中一本 (G2) は断片である。もう一本 (G1) も冒頭と中間と末尾の一部が欠落し、また部分的に判読できない箇所も散見されるが、残存する部分もかなりあるので、その概要を知ることができる。第二に、12 世紀 (AD 1196) の 1 本のネワール貝葉写本 (完本) を使用したサマスラミ校訂本 (S) がある ([Vaidya 1961] に再版)。KV の蔵訳や漢訳は、概ねこの ver. に対応する。第三に、第二の ver. を基に 15 世紀頃のネパールで再編された『グナ・カーランダ・ヴェーハ・スートラ』がある [Lokesh Chandra 1999]。

これらの三種の中、第一と第二の ver. との間には直接的に対応する部分と対応しない部分とがあり、それらはメッテ校訂本に示される<sup>1)</sup>。S における G1 との対応関係のない部分には、蓮華上如来が観自在から六字真言を授けられたこと等、この真言に関する重要な内容が説かれるとともに、准胝陀羅尼も述べられる。一方メッテ校訂本には全体に渡ってこれらは見出されない。メッテ校訂本に使用されるギルギット写本と S に使用されるネワール写本との間の年代の差異の大きさを考えれば、第一の ver. の成立後、それに基づいて第二の ver. が一部改変されて再編された可能性が高い。従って第二の ver. に説かれる六字真言の重要箇所や准胝陀羅尼も、その際に導入されたものと推定される。そうであるならば、これらの内容が新たに導入されたのには如何なる意義があったのか。本稿では、第一と第二の ver. の間における相違箇所を中心に比較検討することによって、このよう

『カーランダ・ヴェーハ・スートラ』における六字真言と准胝陀羅尼（佐久間）（101）

な問題について考察したい。なおKVについては、第二の ver. に基づいた [Studholm 2002] 等の先行研究もあるが、本研究のように第一と第二の ver. との比較の視点に立って、六字真言や准胝陀羅尼について考察したものはない。また准胝陀羅尼に関しては [酒井 1979] [上村 1989] [大塚 2013: 753-755] の研究があるが、KV には言及されていない。

## 2. S と G1 との対応関係及び六字真言の説かれる箇所

S の内容は、便宜上第 I 部（全 16 章）と第 II 部（全 8 章）とに分かれる。一方 G1 では、S の第 I 部第 1 章（I, 1）から I, 11 の途中まで欠落し、I, 11 の途中から II, 3 の冒頭部分まで対応箇所がある。その後 S との対応箇所は中断し、再び S の第 II 部第 7 章（II, 7）の途中より対応箇所が復活する。しかし G1 は S, II, 8 の途中に相当する箇所から最後まで欠落する。S の第 I 部では、輪廻世界での観自在の救済が中心に説かれており、その中で六字真言は I, 11 のみに述べられる。この部分では観自在が阿修羅王バリに対して、将来シュリーという名の如来になるという授記を与えること、またその如来の仏国土では六字真言が獲得されること等が説かれる。一方第 II 部では、六字真言は II, 2-7 に説かれ、それらには除一切蓋障菩薩（除蓋障）が世尊の対告衆であるとともに求道者のモデルとして登場し、その聴聞と求道の旅が述べられる。

## 3. S における除一切蓋障菩薩の聴聞と求道の旅

世尊から除蓋障が聴聞した教えは、便宜上、次の A.1, 2, 3 に分けられる。

(A.1) 第 II 部第 2 章では、世尊が除蓋障に対し観自在の複数の毛孔に各々広大な宇宙があることを説く。それを聴いた除蓋障は、世尊に観自在の毛孔を見たいと申し出る。それに対して世尊は、普賢菩薩ですら毛孔を求めて十二年間彷徨ったが見ることはできなかつたと述べる。しかし六字真言を祈念する者はその毛孔に生まれ、輪廻することなく毛孔から毛孔に渡り歩き、涅槃の地を目指す限り毛孔に留まると説く。ここでは観自在の毛孔が通常では見ることすらできないが、六字真言はそこに転生するための優れた機能をもつことが強調される<sup>2)</sup>。

(A.2) II, 3 の前半部では、世尊が除蓋障に、六字真言は観自在の最高の精髓であると述べる。なおこの直後から S と G1 との対応箇所は中断する。S では続いて六字真言の様々な功德が説かれる。例えばこの真言を唱えれば、仏菩薩、天、四天王、龍王が集まり、大地を守護すると述べられる。また金剛の身体や弁才の

## (102) 『カーランダ・ビューハ・スートラ』における六字真言と准胝陀羅尼 (佐久間)

獲得さらには悟りへの到達といった功德が説かれ、六字真言は現世利益と解脱とをもたらすことが述べられる。次に除蓋障は世尊に六字真言の獲得方法を尋ねる。それに対し世尊は、かつて自ら六字真言を求めて宝上如来を訪れ、さらにこの如来に蓮華上如来を訪ねるように指示され、そこに行ったことが説かれる。

(A.3) II, 3の後半部からII, 5までにおいて、世尊が蓮華上如来から六字真言の功德の広さを聴き、また蓮華上如来が六字真言を阿弥陀の極楽浄土で観自在から授けられた話が、世尊によって除蓋障に対して語られる。ここでは阿弥陀が無数の世界を彷徨った蓮華上如来を見て、観自在に六字真言をこの如来に授けるように告げる。しかし観自在は「六字大明曼荼羅」を見ていないものには授けられないと答え、その曼荼羅を説く。その曼荼羅は四角形で、中央に阿弥陀が、その右にマハーマニダラ (大いなる摩尼宝珠を持つ者) 菩薩が、左に六字真言の神格化である六字大明 (女神) が存する。六字大明は四臂で左手に蓮華を右手に数珠を持ち、二臂は一切王の主の印を結ぶ。この曼荼羅が蓮華上如来に教示された後、観自在はこの如来に六字真言を授ける。曼荼羅ではマハーマニダラ菩薩と六字大明の持物の一つである蓮華によって、六字真言に含まれるマニ (摩尼宝珠) とパドマ (蓮華) とが視覚化・象徴化される。また曼荼羅の本尊が阿弥陀であるのは、蓮華上如来が阿弥陀の浄土で六字真言を授けられることを示唆する。このように阿弥陀の浄土を舞台として六字真言の視覚的・象徴的側面が強調される。

次にSにおける除蓋障の求道の旅の話は、便宜上、以下のB.1, 2に分けられる。

(B.1) II, 6では、除蓋障は世尊から、六字真言を受持する説法師がヴァーラーナシーに在ることを聴いて旅に出る。そして説法師と出会い彼から六字真言の功德を聴く。次に観自在から六字真言の伝授を許可され、説法師は除蓋障にそれを授ける。その後、除蓋障は世尊の存する祇園に赴く。

(B.2) II, 7では、除蓋障は世尊に六字真言を獲得したことを報告する。すると七億七千万の正等覚者が集まり、「七千万の正等覚者に帰命する。オーム、チャレー、チュレー、チュンデー<sup>3)</sup>、スヴァーハー」という陀羅尼を唱える。句中の「チュンデー」は、仏母の准胝 (cundā) に対する呼びかけの言葉であり、この句は一般に准胝陀羅尼とされるものである。cundāは「うながす」「鼓舞する」を意味する動詞のcud-を語源とし、それは「仏道修行に励むように人を鼓舞する女神」であると解釈される [上村 1989]。

除蓋障が六字真言を獲得した後、この陀羅尼が唱えられるが、それにはどのような意味があるのか。この陀羅尼は蓮華上如来が六字真言を獲得した際には唱え

『カーランダ・ヴェーハ・スートラ』における六字真言と准胝陀羅尼（佐久間）（103）

られず、蓮華上如来の話は終わっていた。一方除蓋障の場合には准胝陀羅尼の後に観自在の毛孔が再説されており、これに関係すると推測される。この毛孔の再説は、世尊が除蓋障に対して語る形式をとるが、除蓋障は既に六字真言を獲得しているので、実際に毛孔を出入りすることが含意される。例えば除蓋障はチッタラージャという名の毛孔からドヴァジャグラという名の毛孔へ渡るが、後者では楼閣の中で如来が説法する [Vaidya 1961: 302, 20-27]。このように再説される毛孔において菩薩、縁覚、如来が説法することが詳しく述べられ、除蓋障は観自在の身体における教化の場を体験することになる。一方除蓋障が求道の旅に出る前に世尊から聞いた観自在の毛孔の様子は事前に聞いた話に過ぎない。またこれらの毛孔には、ガンダルヴァ、キンナラ、天子、十地の菩薩、百の仏が存する。その中菩薩やキンナラの説法は述べられるが、縁覚や如来の説法は説かれない。このように准胝陀羅尼の後に再説される観自在の毛孔は、除蓋障が実際に訪れることのできる場であるとともに、除蓋障が世尊から聞いていた毛孔よりも高次の存在が教化する場として説かれる。

このような内容と前述の上村説とを総合すれば、KVにおける准胝陀羅尼は、六字真言を獲得した求道者を励まし、さらに観自在の身体にある仏菩薩が教化する場へと導く役割をもつと考えられる。なおSとG1との間で対応の無い箇所は准胝陀羅尼の記述までであり、その後の毛孔の記述から対応箇所が復活する。また除蓋障の求道の旅の話は、この菩薩が観自在の毛孔をすべて見終わったところで終了する。

#### 4. 相違箇所の比較

G1にはSとは異なる除蓋障の聴聞と求道の旅が見出される [G1, fols. 45b1-71b7]。ここでは除蓋障は世尊から六字真言や悪趣を救う蓮華印の功德等についての説法を聴く。次に六字真言を求める除蓋障は悪魔マーラによって仕組まれた困難な行、例えば金剛の刺で身体を切り刻まれることや毒を盛られること等を克服した末、帝釈天によって阿弥陀の浄土に連れてゆかれ、そこで六字真言を意味する大陀羅尼と印を授けられる。但しSのように除蓋障が六字真言を獲得した後、准胝陀羅尼によって鼓舞される話はみられない。このようにSにおける除蓋障の聴聞と求道の旅の話は、G1と比べて相当に異なる。

次にSには六字大明曼荼羅が説かれるが、それはG1には見出されない。代わりに除蓋障の求道の旅の話の後、マヘーシュヴァラ（シヴァ）とウマー妃との会話

## (104) 『カーランダ・ヴェーハ・スートラ』における六字真言と准胝陀羅尼 (佐久間)

が説かれる。その中でシヴァは妃に曼荼羅を説示する [G1, fols. 74a1-76a8]。この曼荼羅には三宮殿があり、中央には観自在が、その右には阿弥陀が、左には釈迦が描かれる。また曼荼羅には除蓋障、サーガラ龍王、持明者、華齒女 (puṣpadantī)、虚空蔵菩薩、鬼子母神も描かれる。三宮殿において、観自在が阿弥陀と釈迦との間に存するのは、両者の間を仲介する観自在の役割があるからと思われる。例えば観自在が釈迦の存する祇園へ行き生類救済の報告をした後、阿弥陀から釈迦へ贈られた蓮華を、観自在が釈迦に渡したことが説かれる [G1, fols. 81a5-7]。このように G1 の曼荼羅では六字真言よりも阿弥陀と釈迦との間を執り持つ観自在の役割の方が強調される。また G1 の曼荼羅に描かれる除蓋障は、前述のように六字真言を獲得した存在であるが、この箇所ではそれについて述べられない。さらに持明者は香炉と花輪を持つが、六字真言との関係は見出されない。サーガラ龍王や鬼子母神は伽梵達摩訳『千手経』における千手観音の眷属に<sup>4)</sup>、また華齒女と鬼子母神は『不空罽索神変真言经』「出世間儀軌」に説かれており [大塚 2004: 129, 177] (大正蔵 no. 1092, vol. 20, 302b)、これらは初期密教の観自在信仰と関わるが、六字真言とは直接に関係しない。さらに G1 の曼荼羅は、S の曼荼羅のように六字真言の獲得のために必見とも述べられていない。このように G1 の曼荼羅は、S の曼荼羅と比べて全体的に六字真言との繋がりが希薄であるとともに、この真言を視覚的・象徴的に表現する機能も極めて弱い。従って S を含む第二の ver. の編纂では六字大明曼荼羅のような六字真言と密接に関わる画像が加えられており、これらの点が改善されたと考えられる。

## 5. 結び

以上の資料を見る限り、S 等の第二の ver. の編纂では G1 の第一の ver. における除蓋障の聴聞と求道の旅の話大幅に書き換え、六字大明曼荼羅や准胝陀羅尼の要素を新たに KV に導入したものと推定される。そこには第一の ver. では脆弱であった六字真言の視覚的・象徴的機能、及び六字真言を獲得した求道者を励まし、さらに観自在の身体にある仏菩薩が教化する場へと導く准胝陀羅尼の機能を加えることによって、呪文の威力や働きを強化するという重要な意義があったのではないと思われる。

1) S と対応関係のある箇所は [G1 fols. 20a-45a, 76b-83b] (fols. 1a-19b 欠損) であり、無い箇所は [G1 fols. 45b-76a] (fols. 54a-67b 欠損) である。

『カーランダ・ヴェーハ・スートラ』における六字真言と准胝陀羅尼（佐久間）（105）

- 2) 毛孔に宇宙が広がるという考え方は、『華嚴経』「入法界品」第 53 章の普賢の身体の影響を受けるが [Studholm 2002: 47-49], *KV* では各々の毛孔が詳説される。
- 3) *S* では *cunye* (校訂者による *cunde* の読み間違いか?) とあるが、ヴァレンドラ博物館蔵の 11-12 世紀の写本 [Siddhanta 1979: 402-403] にある *cunde* の異読を採用する。
- 4) 前者は「婆（姿）伽羅龍」後者は「神母女」と記す（大正蔵 no. 1060, vol. 20, 108b）。

〈参考文献〉

〈一次文献〉

大塚伸夫 2004. “Transcribed Sanskrit Text of the Amoghapāśakalparāja Part V.” 『大正大学総合佛教研究所年報』 26: 120-183.

Lokesh Chandra, ed. 1999. *Kāraṇḍa-vyūha-sūtra or the Supernal Virtues of Avalokiteśvara*. Śāta-Piṭaka Series, vol. 394. New Delhi: Aditya Prakashan.

Mette, Adelheid. 1997. *Die Gilgitfragmente des Kāraṇḍavyūha*. Swisttal-Odendorf: Indica et Tibetica Verlag.

Vaidya, P. L., ed. 1961. *Mahāyānasūtrasaṅgraha*. Part 1. Buddhist Sanskrit Texts, no. 17. Darbhanga: The Mithila Institute.

〈二次文献〉

大塚伸夫 2013 『インド初期密教成立過程の研究』 春秋社。

上村勝彦 1989 「准提観音の起源」 『東方』 5: 29-36.

酒井紫郎 1979 「准提佛母 (Cundī) について」 高野山大学仏教学研究室編 『伊藤真城・田中順照両教授頌徳記念仏教学論文集』 東方出版, 221-272.

佐久間留理子 2005 「『カーランダ・ヴェーハ』の研究」 『印仏研』 54 (1): 127-132 (L).

——— 2006 「『カーランダ・ヴェーハ』における観自在菩薩の身体観」 『印仏研』 55 (1): 92-97 (L).

——— 2012 「『カーランダ・ヴェーハ・スートラ』の展開とその宗教的背景」 『日本仏教学会年報』 77: 109-129 (L).

——— 2013 「サマスラミ校訂本『カーランダ・ヴェーハ・スートラ』の原典批判研究」 『印仏研』 62 (1): 207-211 (L).

Siddhanta, Sachindra Nath. 1979. *A Descriptive Catalogue of Sanskrit Manuscripts in the Varendra Research Museum Library*. Vol. 1. Rajshahi: Varendra Research Museum.

Studholm, Alexander. 2002. *The Origins of Om Maṇi Padme Hūm: A Study of the Kāraṇḍavyūha*. New York: State University of New York Press.

(本稿は平成 27 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (A)) (25244003) 「インド的共生思想の総合的研究」 (研究代表者 釈悟震, 研究分担者 佐久間留理子) による研究成果の一部)

〈キーワード〉 仏教説話, 観自在, 六字真言, 准胝陀羅尼

(公益財団法人中村元東方研究所専任研究員, 博士 (文学))